

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H06113

研究課題名(和文) 中近世日本と東アジアにおける木造建築の変革に関する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on the Transformation of Wooden Architecture in Medieval and Early Modern Japan and East Asia

研究代表者

鈴木 智大 (SUZUKI, Tomohiro)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：60534691

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、東アジアの視点に立ち、木造建築の生産システム論の創生に向け、東アジア各国・各地域の木造建築について、社会的・技術的・自然環境的な側面から総合的に比較する研究構想の一環として実施した。中世から近世の日本と同時代の中国・台湾・韓国における木造建築の構造について、基礎情報および論考を集積・把握し、それぞれの変遷および相関関係を比較検討することで、技術的な側面から研究の全体構想の根幹を構築をおこなった。また国際研究会として東アジア木造建築史研究会を主宰し、東アジア各国の最先端の研究成果について共有した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、これまで日本建築史において語られてきた古代初頭、中世初頭、近世初頭の各時期における大陸・半島からの建築造営技術の導入について、日本・中国・韓国の新たな事例を踏まえ、検証をおこなった。その結果より、広範囲な時代における各国・各地域における同時並行的な様式、技術の変遷を見出した。東アジア建築史の基盤構築の端緒をつかむことができたといえる。

研究成果の概要(英文)：In this study, from the perspective of East Asia, toward the creation of the production system theory of wooden buildings, I conducted it as part of a research concept that comprehensively compares wooden architecture in East Asian countries and regions from the social, technical, and natural environmental aspects. I have collected and grasped basic information and articles on the structure of wooden buildings in China, Taiwan, and South Korea, which are the same period as Japan in the Middle Ages and the early modern period. By comparing and examining the transitions and correlations of each, the basis of the overall research concept was constructed from the technical aspect.

As an international study group, he presided over the East Asian Wooden Architecture History Study Group and shared the cutting-edge research results of each East Asian country.

研究分野：建築史

キーワード：架構 中国 台湾 韓国 古建築 貫 枋 建築史

1. 研究開始当初の背景

東アジア建築史研究と日本の遅れ 東アジア地域については、近年、社会的な交流が活発になるにつれ、歴史学をはじめとする人文学においても、再検討が盛んにおこなわれている^{注1)}。建築史学も同様で、東アジア比較建築史の構築について、盛んにその必要性が論じられた^{注2)}。

そして都市的スケールでの研究や、近代建築に関する研究については、蓄積されてきた。その一方でこれまで各国で研究が蓄積されてきたはずの古代から近世の木造建築に関しては、個別事例研究の域を脱していなかった。特に日本においては、研究蓄積が多い分、既往研究における様式的概念の縛りが強く、一国建築史として完結してしまっている感があった。その点、韓国では、国家的研究機関が中国の古代建築の実測図面・写真集を編纂するなど、当該分野をリードしつつあり^{注3)}、日本はすでに、遅れをとりかけている状況にあった。

東アジア木造建築架構研究による固定概念からの脱却 代表者はこのような問題意識のもと、東アジアの木造建築研究の基盤構築を目指し、これまで研究代表を務めてきた科研費により中世日本と東アジアの架構システムの研究を推進し、比較研究という手法の有効性を示してきた^{注4)}。

日本と中国の現存遺構の比較により、これまで見向きもされていなかった中世末期ごろに東アジアの各地域にあらわれる「穿插枋」と呼ばれる構造部材に注目し、東アジアの木造建築史に新たな変革の視点を見出した。また、これらの知見を背景に、日本における中世の建築様式を中国における技術の変革に当てはめる構図の提示をおこなった。

比較研究を通して、これまでの一国建築史において、最も根幹を担ってきた様式論を超える視点を得られることを確信した。特に、これまで古代と中世の冒頭においてのみ想定されていた中国・朝鮮半島からの影響について、先行研究による固定概念から脱却し、さらに巨視的に再検討する必要性を痛感した。

本研究は、以上の研究成果を踏まえ、中世から近世にかけての東アジア各国・地域の木造建築の構造の変革のあり方の解明を目指した。具体的には、先に挙げた「穿插枋(繫貫)」などの、具体的な構造部材に焦点を当て、その構造的な役割と変化を追うこととした。

注1) 申請者も研究協力者として名を連ねた基盤研究(S)H17~21「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」などに代表される。

2) 高村雅彦編『アジアの都市住宅』(勉誠出版、2005年)などでは、研究の集積がおこなわれている。

3) 韓国国立文化財研究所 編『中国山西省の古建築』(韓国国立文化財研究所、2007年)。

4) 基盤研究(C)H24~27「中世日本と東アジアにおける木造建築の架構システムに関する比較研究」
若手研究(B)H21~23「中世日本と中国の木造建築における架構システムに関する比較研究」

2. 研究の目的

本研究では、研究対象を中近世日本と同時代の東アジアの木造建築として、その構造的な特徴を分析し、東アジアにおける同時代性と地域性を見出すことを目的とした。(下図)

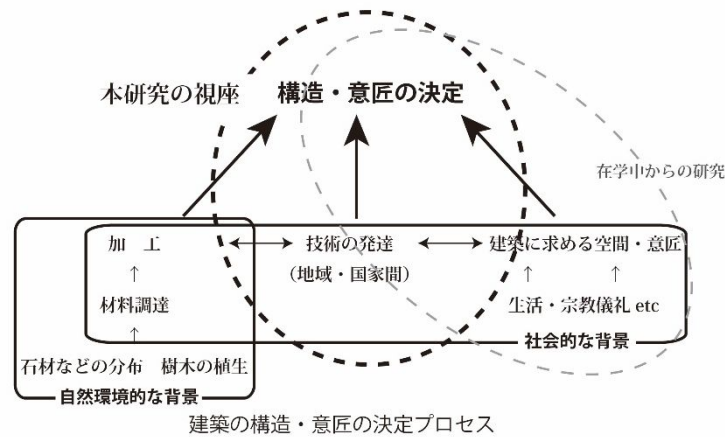


図 研究の全体構想と本研究の視座

具体的には、次の4段階のプロセスを踏んだ。

- (1) 研究対象となる木造建築の平面図および断面図の文献資料からの収集。
- (2) 木造建築の現地調査による図面情報の収集および補完。
- (3) 木造建築の構造に関する模式図の作成を通した、建築構造の類型的な把握による新視点の抽出。
- (4) 各種建築部材に着目した比較・検討
A. 穿插枋 (繫貫) B. 昂 (尾垂木) C. 3に基づく新視点

本研究では、(1)～(3)について、地域的には中国南部および日本との比較研究で意味をもつ台湾も研究対象とした。また時代的には、近世まで広げて木造建築に関する情報収集を目指した。しかしながら、近世の現存遺構は、中世以前に比較して、急速に増加する。そのため、まずは、近世初期の17世紀までの木造建築で、修理工事の報告があるものに対象を絞り込むことで、全体像の把握を目指した。

(4)では、A. 穿插枋のほかに、B. 昂(尾垂木)に着目した。昂については、中国福建省・浙江省および古代・中世日本における用法に注目し、その役割の違いについて言及しており、これに続いて網羅的な検討を加えることで、明快な構図を提示することが可能になると考えた。その他の視点については、前科研費の手法と同様、(3)の模式図を作成することで、問題点を明確にすることで、類型的な把握をおこない、見通しを立てることを目標とした。

また、これまで一国、地域ごとに個別に研究が蓄積されてきた古建築において、木造建築文化を背景にもつ東アジアを視野に見据えて横断的に取り組むのが、本研究の第一の特質である。より多角的な検討を加えるために、中国・韓国の研究者による視点を活かすことを目指した。具体的には毎年、研究会を開催し、各年度の研究成果について討議した。

3. 研究の方法

本研究では、中近世日本と同時代の東アジアの木造建築について、以下の4段階のプロセスを踏んで探求した。

(1) 図面情報の収集、(2) 現地調査による情報の補完、(3) 模式図の作成を通じた類型的な把握、(4) 各種建築部材に着目した比較・検討

研究対象が日本と中国・台湾・韓国にまたがり、その情報も多岐にわたるため、研究期間を4年と定めた。しかしながら、4年目に開催予定であった国際研究会が、新型コロナウイルス感染症拡大のため、困難となり、翌年度に繰り越し、オンライン開催とすることで対処した。

研究体制

本研究は右図の体制で臨んだ。代表者はこれまで木造建築の架構システムに関して、中世を中心に日中比較研究をおこなってきており、本研究もその延長線上にある。

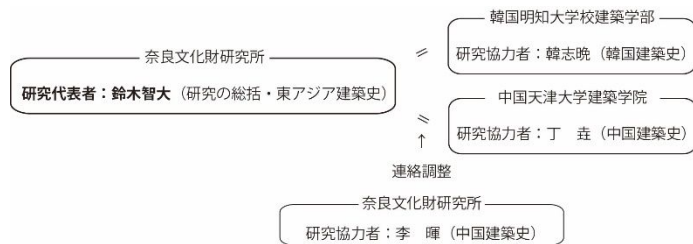


図 本研究の体制

研究協力者の丁・李は、中国建築史の専門家として、韓は韓国建築史の専門家として前身科研から密な研究体制を組んできた。引き続き、調査において調整を依頼するとともに、毎年開催する研究会に招へいすることで、日本建築史を基盤としない立場からの視点を獲得した。

4. 研究成果

本研究では、上述の研究目的・研究方法・研究体制に基づき、研究を遂行した。

これまでに対外的に発表することができた成果は大きくわけて2点ある。1点目は貫材の使用法に関する東アジア比較研究を深化させ、論文として公表したことである。2点目は、本科研費に基づき国際研究会である東アジア木造建築史研究会を開催し、その内容を報告書として公表したことである。以下、個別に概要をまとめる

(1) 貫材の使用法に関する東アジア比較研究の深化

まず、これに関連する主要な論文と口頭発表を以下に掲げる。

SUZUKI Tomohiro “What Did Chinese Chuancha-fang Influence the Timber Architecture of East Asia” ISAIA2016, Sendai Japan, 2016.9.22, pp.1006-1009, 査読あり)。

鈴木智大「日本と中国における繋貫の出現と変容にみる東アジア木造建築の変革」(関西建築史研究会、京都、2017年9月30日)。

鈴木智大「日本と中国における繋貫の出現と変容」(『建築の歴史・様式・社会』中央公論美術出版社、pp.423-439、2018年1月20日)。

鈴木智大 著、唐聡 訳、包慕萍 審訳「日本佛教寺院建築之類型和様式的意義——以構建東亞木構建築史為目的」(和題「日本の仏教寺院建築における類型と様式の意義 東アジア木造建築史構築のために」(『中国建築史論叢刊』15、清華大学出版社、2018年5月、pp.51-60)。

鈴木智大「中世～近世初期の日本における建造物修理の技法とその意義」(2019年3月16日、メンテナンス研究会)

上記の論考は、主として、日本と中国の木造建築における繋貫の出現とその変容に関する

ものである。両国における貫材に関する用語を整理したうえで、貫材の使用箇所注目することで、木造建築における構造の発展のあり方をあきらかにした。

元代以前の繫貫の事例が、浙江省を中心とする中国南部に集中し、明代・清代に入って、北京の故宮をはじめとする中国北部へ展開した。そして中世日本の建築で側柱の頭貫高さの繫貫を、黄檗様建築で側柱の飛貫高さの繫貫を確認でき、各時代における建築技術の伝播のあり方を示すこととなった。

本研究では、この他の部材に関する比較研究の視点も獲得しており、今後、継続な公表を目指したい。

(2) 東アジア木造建築史研究会

国際研究会として、東アジア木造建築史研究会を開催した。各回の発表は、以下の通りである。なお所属は当時のものである。

第1回(2017年2月)

金 碩顯 (KIM Sukhyun、東北大学)「虚梁から見た高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の特質」

俞 莉娜 (YU Lina、早稲田大学)「中国宋金時代の磚室墓に見る倣木構造について 河南中北部、山西南部を中心に」

第2回(2018年2月)

白 昭薫 (BAIK Sohun、韓国・明知大学校)「『营造法式』と修徳寺大雄宝殿及び浮石寺無量寿殿の設計原理」

周 淼 (ZHOU Miao、中国・浙江大学)「五代・宋・金代の晋中地域における木造建築研究の概説および晋祠聖母殿の肘木・通肘木・梁の木取方法の研究」

野村俊一 (NOMURA Shun'ichi、東北大学)「中世仏堂の移柱・減柱と東アジア 貫・梁・台輪をめぐって」

第3回(2019年2月)

李雨鍾 (LEE Woojong、韓国・嶺南大学校)「高麗時代における多包系建築の成立過程」

唐 聡 (TANG Cong、元・日本学術振興会特別研究員、奈文研)「7～11世紀の敦煌壁画にみる外周等間型柱配置の仏殿」

第4回(2020年11月)

鈴木智大 (SUZUKI Tomohiro、奈文研)「19世紀の日本における建築図面の使用法」

孫 毅華 (SUN Yihua、中国・元・敦煌研究院)「敦煌の唐代壁画にみられる2種類の垂脊頭瓦飾りの変遷と名称に関する考察」

上記の研究発表とこれらに対する講評と討議の内容について、『東アジア木造建築史研究会記録1』(奈良文化財研究所、2021年)として取りまとめ刊行した。

以上のように、本研究においては、当初設定した研究の目的と方法に基づき、東アジアにおける比較建築史の試みを深化することができた。またこれに加えて、国際研究会の開催を通じて、当初予定していたよりも、規模の大きな東アジアにおける研究者のネットワークを構築することができた。

本研究で得た研究の視点と研究組織は、2020年度より開始した基盤研究(B)「古建築用語の相互訳及び英訳を通じた系統的把握による東アジア木造建築史の基盤構築」(研究代表者:鈴木智大、研究分担者:海野聡、加藤悠希、李暉)において、発展的に継続する。より一層、東アジア木造建築の比較研究を推進する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木智大 著、唐聡 訳、包慕萍 審訳	4. 巻 15
2. 論文標題 日本仏教寺院建築之類型和様式の意義－以構建東亜木構建築史為目的	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国建築史論叢刊	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 鈴木智大
2. 発表標題 中世～近世初期の日本における建造物修理の技法とその意義
3. 学会等名 メンテナンス研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木智大
2. 発表標題 日本と中国における繋貫の出現と変容にみる東アジア木造建築の変革
3. 学会等名 関西建築史研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 SUZUKI Tomohiro
2. 発表標題 What Did Chinese Chuancha-fang Influence the Timber Architecture of East Asia
3. 学会等名 ISAIA2016（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木智大
2. 発表標題 東アジアの歴史的禅宗寺院における座禅空間
3. 学会等名 聞慶瞑想村造成のための国際学術会議（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 藤井恵介先生献呈論文集編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 456
3. 書名 建築の歴史・様式・社会	

1. 著者名 鈴木智大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 258
3. 書名 東アジア木造建築史研究会記録 1	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	丁 ヤオ (DING Yao)	天津大学・副教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	韓 志晩 (HAN Jiman)	明知大学校・副教授	
研究協力者	李 暉 (LI Hui) (30772751)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部平城地区遺構研究室・アソシエイトフェロー (84604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 第4回東アジア木造建築史研究会	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 第3回東アジア木造建築史研究会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第2回東アジア木造建築史研究会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 第1回東アジア木造建築史研究会	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	天津大学	重慶大学	北京大学	他1機関
韓国	明知大学校	嶺南大学校		